

## 多摩川（東京都、神奈川県）

私が「川」という単語をきいて真っ先に思い浮かべるのは、奥多摩湖口から東京都と神奈川県の県境を通り東京湾へと流れる一級河川、**多摩川**である。それは多摩川が、私が成長する中でいつもそばにあった最も身近な川だからであろう。

このレポートを書くにあたり私が多摩川を訪れた日は、よく晴れていた。太陽の光が水面に反射し、きらきらと光っていた。

川幅は、数十メートルはあるように思う。よく見てみると、遠くの方で鴨の群れが川を泳いでいた。一羽の鴨が群れから離れてしまい、流れに逆らって追いつこうとしていたので、水の流れは緩やかに見えるが、実際には速いのかも知れない。河川敷に行くことはよくあるが、川自体を注意深く見る機会はこれまであまりなかった。私は多摩川の水質汚染、ゴミの多さを聞かされて育ったため、川に近づいてみて、水の透明度に驚いた。多摩川はこんなにきれいだったのかと。川には目で見る限りゴミは見当たらず、かなり透き通っていた。東京と神奈川の岸を結ぶ橋には、小田急線、車と歩行者が通っている。夏の台風で漂着したと思われる大きな枝がいくつか目に入った。しかし、陰の方に目を向けてみると、放置された自動車、花火やバーベキューの跡などが見つかる。また橋の下にはホームレスの家が幾つもあり、友人の話によるとソファーなどもあってかなり整っており、長い間同じ場所でそのようにして生活していることがうかがえる。

幼い頃住んでいた東京都大田区山王、現在住んでいる東京都世田谷区成城から程遠くない場所を流れる多摩川に、私は何度も足を運び、たくさんの時間を過ごしてきた。小学生の頃、週末には頻繁に多摩川へ出かけた。車に昼食のお弁当と遊具をのせて、家族四人で多摩川へ向かったのをよく覚えている。多摩川下流の河川敷で、フリスビー、バドミントン、キャッチボールなどをした。昼頃になると、ビニールシートを敷いてお弁当を食べた。週末の日中、多摩川べりは私と同じようにピクニックやスポーツを楽しむ家族連れで賑わっていた。また、幼稚園に通っていた頃には、自分でスーパーの袋を切り開いて作った凧を持って家族で多摩川を訪れた。私は人生初めての凧揚げを、ここで経験した。小さな体で父親とともに走り、決して高くはないが凧が揚がったのを覚えてい



る。お正月の多摩川には、凧を揚げている人が多く見られた。晴れた空に、いくつもの凧が空高く上がっていた光景を微かに記憶している。

高校入学とともに、現在住んでいる世田谷区に引っ越した。幼い頃のように家族で出かけることはなくなったが、私は今も変わらず多摩川を訪れている。多摩川べりで行われる調布市花火大会には、毎年行っている。夏の終わりには、久しぶりに会う友達と多摩川に集まった。暗い夜の河川敷で、花火をしながら互いに近況報告をした。ある時は友達とゆっくり話をしたいと思い、私は多摩川に行こうと誘った。繁華街の賑やかさと人混みがあまり得意ではない私にとって、多摩川は友達と行きたい場所の一つである。夏休み中ということもあり、バーベキューをする学生、野球をする中学生、ボール遊びをする親子、自転車で通り過ぎる地元の方、釣りを楽しむ人たちがたくさん見られた。中洲まで歩き、冷たい水に足を入れた。中洲に立つと、自分に向かって流れる多摩川が見られる。普段は横に流れる多摩川を見ているので、新鮮に感じた。大学に入学してから、趣味で写真を撮るようになったので、友達と二人でカメラを持って、休日の多摩川に出かけたこともある。冬が近づいて寒い中、風になびくススキ、何輪か咲いていたコスモス、昼間の日差しの下でくつろぐ猫、作業中の職人、向こう岸で遊ぶ親子をカメラにおさめながら歩いた。その日、同じようにカメラを持って歩いていたラトビアから来た方と知り合った。多摩川に沿ってひたすら歩き、途中見つけた桑の木の実を、幼い頃のように採って食べたこともある。

1940年頃の多摩川の様子を祖母に聞いた。祖母が通っていた女学校では、旧目蒲線（現多摩川線）沼部駅近くの農園で、一年生から五年生が月曜日から金曜日を一日ずつ担当し、じゃがいもなどを育てる農作業をしたそうだ。午後は河川敷で運動をする時間があり、秋には多摩川に沿って最大で約四十キロ歩く競歩大会が行われた。上流では鮎が、下流でも水はきれいで小さな魚が泳いでいたそうだ。

1960年代後半からの多摩川について、父から話をきいた。40年前の多摩川は、私が今目にしているものからは想像できないような状態だったようだ。父は幼い頃、河川敷で野球や缶けりをして遊んでいた。水はきれいとは言えなかったが、河口近くでもボラや稀にタコが釣れた。コイは釣れなかったが、はねているのを見たことがあったそうだ。この頃から既に、コンクリートで岸辺が固められていたので、水の中に入って遊ぶことはできなくなっていた。同時に多摩川の水は急激に汚くなって、不快な臭いがしていたそうだ。1970年代初め頃になると、橋から釣りをする子供の姿は見られなくなり、川には発泡スチロールのかけらや空き缶などがたくさん浮かんでいたという。川の中のコンクリートの段差には、石鱈の泡が盛り上がって、クリームのような真っ白の塊が水に浮

かんでいた。川面一面に広がっている場所もあり、まるで雪が積もったように見えていた。あのころの多摩川は、本当に汚かったと語った。1970年代後半になると、石鹼の泡とひどい臭いはなくなり、水はきれいと言えるようになったようだ。しかし、川のゴミは少なくなった半面、河川敷に放置された自転車などが目立つようになった。また、以前はいなかったホームレスの家がこのころから目立つようになった。父が就職し、地方での転勤を終えて東京へ戻った1990年頃、家族で訪れ久しぶりに見た多摩川が、見違えるようにきれいになっていたのでとても驚いたという。水質も改善され、水辺まで行かれる場所もでき、緑地も増えた。魚の姿や鳥の姿も増えてきた。ただ、多摩川のコイが、環境ホルモンの影響で雌化しているかも知れない、などというニュースもあり、多摩川の水はまだまだ改善途上なのではないか、と最後に付け加えた。

京浜河川事務所による多摩川の公式の Web page では、花火大会などの多摩川に関連するイベントの予定やプロジェクトの概略をはじめとして、多摩川について知る、多摩川を利用する、イベントに参加する、という項目で情報を提供している。多摩川についての基本的な情報として、漁獲量や「多摩川に架かる橋の長さ Top3」といったランキング形式で、あらゆるデータを掲載している。多摩川の歴史年表は、縄文時代から平成まで時代別に、簡単に書かれている。歴史、多摩川八景、生息する生き物や植物について、写真やビジュアルを多く利用している。散策マップ、桜や紅葉のスポット、多摩川周辺の博物館や美術館情報、味覚狩りなど、人々が多摩川を訪れるにあたって便利な情報を幅広く掲載している。また、より詳しい情報を得られる施設の紹介や、小学生向けのページも用意されている。一般の人が川をきれいにするために参加できる運動の紹介とともに、多摩川を安全でやさしい、いい川にしようとするプロジェクトや事業について詳しく掲載している。「知りたい、利用したい、参加したい」と項目別になっているため、たくさんの情報が整理整頓され、とても使いやすい。

私にとって多摩川とは、都会の煩わしい混雑を抜け出して、気軽に触れることができる身近な自然である。何か目の前のことで悩んでいる時、川の流れを見ていると気分が晴れる。多摩川はコンクリートで整備されているが、自然に近い状態で残っている場所もあり、水に直接触れることもできる。桜やススキ、コスモスなど草花が咲き、四季を感じられる東京では数少ない場所の一つだと思う。インターネットで「多摩川」と検索すると多く出てくる「多摩川散歩」という言葉に見られるように、身近な自然が減っていく中で、人々が自然に触れあう機会を求めて多摩川を歩き、写真撮影や読書を楽しむようである。私が多摩川を訪れて目にするもので、一番嬉しいと感じるのは、川縁で遊ぶ親子である。様々なレジャーが生まれた現代でも、多摩川を訪れる親子がたくさんい

る姿は、見ていてとても微笑ましい。私は川がとても好きで、流れる水の音をきくとすぐに川を探してしまうが、今思えばこれは私が海でも山ではなく、川に触れる機会が一番多かったからかもしれない。私にとっての多摩川の存在が、多くの人にとってもそうであることは確かで、またそれがこれから、世代が変わっても、同じような存在であってほしいと思う。コンクリートで固められ、大きな橋が架けられ、ダムが建設され、多摩川が人工的に整備された川であることは否めないが、必要以上に人間の手が加えられることなく、自然に近い形を残した川であり続けることを私は願う。河川敷に放置される花火のゴミや空き缶、ペットボトルや、川縁で生活するホームレスの問題、環境ホルモンによる生態系への影響など、課題は残る。30年前の洗剤で汚染された多摩川を、きれいな多摩川に変えることができたように、残された課題を地域全体で改善に取り組み、達成できるような、愛される川であり続けることを願う。